後撰和歌集 下

特40
163

255
257

後撰和歌集巻第十二

慶應四

女のもとにはしける　　敏行朝臣

我こひのかすをかそへはあまのはらくもりふたかりふる雨のこと

わすれにける女をたもひ出てつかはしける　　讀人不知

うちかへし見まくそほしき古さとのやまとなてしこ色やかはれる

女につかはしける　　枇杷左大臣

山ひこのこゑにたてゝも年はへぬわかものたもひをしらぬ人きけ

身よりあまれる人を思ひかけてつかはしける

帝室
明治
40 7 19
圖書寮

紀友則

たまもかるあまにはあらねとわたつみの底ひもしらすいる心かな

返事侍らさりけれは又かさねてつかはしける

みるもなくめもなき海のはまに出てかへる〳〵もうらみつるかな

あたに見え侍りけるをこゝに　よみ人しらす

こりすまの浦のしらなみたちいて〻よる程もなくかへるはかりか

あひしりて侍りける人の近江のかたへまかりけれは

關こえてあはつのもりのあはすこも清水にみえしかけをわするな

返し

ちかけれと何かはしるしあふさかのせきのほかそと思ひたえなん

つらくなりにけるをとこのもとにいまはとてさうそくなとかへしつかはすとて　平なかきかむすめ

今はとてこすゑにかゝる空せみのからを見んとはたもはさりしを

返し　源宗于朝臣

わすらるゝ身をうつせみのからころもかへすはつらきこゝろなりけり

ものいひける女のかゝみをかりてかへすとて　よみ人しらす

かけにたに見えもやすると頼みつるかひなく戀をますかゝみかな

男のものなといひつかはしける女のゐなかの家にまかりてたゝきけれとえきゝつけすやありけんかこもあけすなりにけれは田のほとりにかへるのなきけるをきゝて

足ひきの山田のそほつうちわひてひとりかへるのねをそなきぬる

文つかはしける女の母の戀をしこひはこいへりける

かごしころへにけれはつかはしける

たねはあれこあふ事かたき岩の上のまつにて年をふるはかひなし

贈太政大臣

女につかはしける

ひたすらにいこひはてぬる物ならはよし野の山にゆくへしられし

伊勢

返し

我やこゝたのむよし野に君しいらは同しかさしをさしこそはせめ

讀人不知

たいしらす

くれなゐに袖をのみこそそめてけれ君をうらむるなみたかゝりて

つれなく見えける人につかはしける

くれなゐに涙うつるこ聞きしをはなこいつばりこわれたもひけん

かへし

くれなゐに涙しこくはみこりなるそてももみちこ見えましものを

あひすみける人こゝろにもあらて別れにけるかこし

月をへてもあひ見んこかきて侍りける文を見いてゝ

つかはしける

いにしへの野中のしみつみるからにさしくむ物はなみたなりけり

たもふここ侍りて男のもこにつかはしける

あま雲のはるゝよもなくふるものは袖のみぬるゝなみたなりけり

かたふたかるこて男のこさりけれは

逢ふここのかたふたかりて君こすは思ふこゝろのたかふはかりそ

あひかたらひける人の久しうこさりけれは遣しける

こきはにこ頼めしここはまつ程の久しかるへき名にこそありけれ

たいしらす

こさまさるなみたの色もかひそなき見すへき人のこの世ならねは

女のもとにつかはしける

住よしのきしにきよするたきつ波まなくかけてもたもほゆるかな

かへし　伊勢

すみの江のめにちかゝらは岸にゐてなみのかすをもよむへき物を

つらかりける人のもとにつかはしける

戀ひてへんと思ふ心のわりなさはしにてもしれよわすれかたみに

返し　贈太政大臣

もしもやと遥見んことを頼ますはかくするほとにまつそけなまし

題しらす　よみひとも

あふことにかたみに見ゆる物ならはわするゝ程もあらましものを

音にのみこゑをきくかなあしひきの山したみつにあらぬものから

秋霧のたちたるつとめていとつらけれは此たひはか

りなんいふへきこといひたりけれは　伊勢

秋ことてやいまはかきりのたちぬらん思ひにあへぬものならなくに

心のうちにたもふことやありけん

みし夢のたもひ出らるゝ宵ことにいはぬをしるはなみたなりけり

たいしらす　よみ人も

白露のたきてあひみぬことよりはきぬかへしつゝねなんこそ思ふ

人のもとにつかはしける

ことの葉はなけなる物といひなからたもはぬためは君もしるらん

女のもとにつかはしける　朝忠朝臣

白なみのうちいつる濱のはまちとり跡やたつぬるしるへなるらん

女に遣しける　大江朝綱朝臣

たほしまに水をはこひしはや舟のはやくもひとにあひ見てしかな

伊勢なん人にわすられてなけき侍るごき〻てつかは
しける　贈太政大臣
ひたふるに思ひなわひそふるさる〻人のこ〻ろはそれそよのつね
返し　伊勢
世のつねの人のこ〻ろをまたみねはなにか此たひけぬへきものを
淨藏くらまの山へなんいるこいへりけれは　平なかきかむすめ
すみそめのくらまの山にいるひこばたこる〳〵もかへりきな〻ん
あひしりて侍りける人のまれにのみ見えけれは　伊勢
日をへても蔭にみゆるは玉かつらつらきなからも絶えぬなりけり
わさこにはあらすこき〳〵物いひ侍りける女ほこひ

さしうこはす侍(さりイ)けれは　よみ人しらす
たかさこの松をみこりこ見しこことはしたの紅葉をしらぬなりけり
返し
こきわかぬまつのみこりもかきりなき思ひにはなほ色やもゆらん
文かよはすはかりにて年へ侍りける人に遣しける
水こりのはかなき跡に年をへてかよふはかりのえにこそありけれ
かへし
なみの上にあこやはみゆる水こりのうきてへぬらん年はかすかは
せうそこつかはしける女のもこよりいな舟のこいふ
ここを返事にいひて侍りけれはたのみていひわたり
侍りけるになほあひかたきけしきに侍りけれはしは
しこありしをいかなれはかくはこいへりける返事に

つかはしける

なかれよるせゝのしらなみ淺けれはこまるいな舟かへるなるへし

かへし　三條右大臣

最上かはふかきにもあへすいな舟のこゝろかろくも歸るなるかな

いと恐ひてかたらふ人のたろかなるさまに見えけれは　よみ人しらす

はなすゝきほに出ることもなきものをまたき吹きぬる秋の風かな

こゝろさしたろかに見えける人につかはしける　中興かむすめ

またさりし秋はきぬれと見し人のこゝろはよそになりもゆくかな

かへし　源是茂朝臣

君をたもふこゝろなかさは秋の夜にいつれまさるこ空にしらなん

ある所にあふみといふ人をいと忍ひてかたらひ侍りけるを夜あけてかへりけるを人みてさゝやきけれは其女のもとにつかはしける　坂上つねかけ

かゝみ山あけてきつれは秋きりのけさやたつらんあふみてふ名はあひしりて侍る女の人にあた名たち侍りけるにつかはしける　平まれよの朝臣

枝もなく人に折らるゝをみなへしねをたにのこせ植るしわかため人のもとにまかりて侍るによひいれねはすのこにふしあかしてつかはしける　藤原成國

秋の田のかりそめふしもしてけるかいたつらいねを何につまゝし平かねきかやう〳〵かれかたになりにけれはつかはしける　中務

あき風のふくにつけてもこはぬかな荻の葉ならはたこはしてまし
こし月をへてせうそこし侍りける人に遣しける　よみ人しらす
君みすていくよへぬらんこし月のふるこゝもにもたつるなみたか
女につかはしける
なか〳〵にたもひかけてはから衣みになれぬをそうらむへらなる
返し
恨むこもかけてこそ見め唐ころも身になれぬれはふりぬこかきく
人につかはしける
なけゝこもかひなかりけり世の中に何にくやしくたもひそめけん
わすれかたうなり侍りけるをここにつかはしける　承香殿中納言

こぬひこをまつの葉にふるしら雪のきえこそかへれくゆる思ひに
わすれ侍りにける女に遣しける　よみ人しらす
菊のはなうつるこゝろをたく霜にかへりぬへくもたもほゆるかな
返し
いまはこてうつりはてにしきくの花かへるいろをは誰かみるへき
人のむすめにいこ忍ひてかよひ侍りけるにけしきを
みてたやのまもりけれは五月なか雨のころつかはし
ける
なかめしてもりもわひぬる人めかないつか雲間のあらんこすらん
またあはす侍りける女のもこにしぬへしこいへりけ
れは返事にはやしねかしこいへりけれはまたつかは
しける

たなしくは君こならひの池にこそ身をなけつこもひこにいはれめ

女につかはしける

かけろふのほのめきつれは夕くれの夢かこのみそ身をたこりつる

かへし

ほのみても目馴にけりこきくからに臥かへりこそしなまほしけれ

せうそこしは〳〵遣しけるをちゝ母侍りてせいしは

へりけれはえ逢ひはへらて　源よしの朝臣

あふみてふかたのしるへもえてし哉みるめなきこゝゆきて恨みん

かへし

春澄善繩朝臣の女

逢さかのせきこもらるゝ我なれはあふみてふらんかたもしられす

女のもこにつかはしける　よしの朝臣

あしひきの山した水の木かくれてたきつこゝろをせきそかねつる

返し

木かくれてたきつ山みついつれかはめにしもみゆる音にこそきけ

人のもこよりかへりきてつかはしける　貫之

あかつきのなからましかは白露のたきてわひしきわかれせましや

返し　讀人不知

たきてゆく人のこゝろをしらつゆの我こそまつはたもひきえぬれ

女のもこにをこかくしつゝ世をやつくさんたかさ

このこいふこをいひ遣したりけれは

高さこのまつこいひつゝ年をへてかはらぬいろこきかはたのまん

人のむすめのもこにしのひつゝかよひ侍りけるをた

やきゝつけていこいたくいひけれはかへりてつかは

よみ人しらす

しける

風をいたみくゆるけふりのたち出ても猶こりすまの浦そこひしき

はしめて女のもとにつかはしける　よみ人しらす

いはねとも我かきりなきこゝろをは雲ゐにこほきひこもしらなん

たいしらす

君かねにくらふの山のほとゝきす（よふことりイ）いつれあたなるこゑまさるらん

せうそこかよはしける女たろかなるさまにみえはへ

りけれは

こひてぬる夢路にかよふたましひのなるゝかひなくうこき君かな

女につかはしける

かゝり火にあらぬ思ひのいかなれはなみたの川にうきてもゆらん

人のもとにまかりてあしたに遣しける

待ちくらす日は菅のねにたもほえてあふ夜しもなこ玉のをならん

大江千里まかりかよひける女を思ひかれかたになり

てこほき所にまかりにたりこいはせて久しうまから

すなりにけり此女たもひわひてねたる夜の夢にまう

て來たりこ見えけれはうたかひにつかはしける

はかなかるゆめのしるしにはかられて現にまくる身こやなりなん

かくてつかはしたりけれは千里みはへりてなほさり

にまこことにをこゝ日なんかへりまうてこしかこ心ち

のなやましくてありつるこはかりいひたくりて侍り

けれはかさねてつかはしける

たもひねの夢こいひてもやみなましなか〳〵何にありごしりけん

やまこのかみに侍りける時かの國のすけ藤原清秀か

むすめをむかへんごちきりてたほやけごこによりて
あからさまに京にのぼりて侍りけるほごに此むすめ
真延法師にむかへられてまかりにければ園にかへり
て尋ねてつかはしける　　忠房朝臣
いつしかの音になきかへりこしかごものへの淺茅は色つきにけり
せうそこつかはしける女の返事にまめやかにしもあ
らしなごいひて侍りけれは
ひき蔦のかくふたこもりせまほしみ桑ごきたれてなくを見せはや
ある人のむすめあまたありけるをあねよりはしめて
いひ侍りけれごきかさりけれは三にあたる女につか
はしける　　よみひごしらす
闇やまのみねの杉むらすきゆけごあふみはなほそはるけかりける

朝忠朝臣ひさしうたごもせて文たこせて侍りけれは
たもひ出てたごつれしける山ひこのこたへにこりぬこゝろ何なり
いごしのひてまかりありきて
まごろまぬ物からうたてしかすかに現にもあらぬこゝちのみする
かへし
うつゝにもあらぬこゝろは夢なれやみてもはかなき物をたもへは
うつまさわたりに大輔かはへりけるに遣しける　　小野道風朝臣
かきりなくたもひいり日のごもにのみ西の山邊をなかめやるかな
女五のみこに　　忠房朝臣
君かなのたつにごかなき身なりせはたほよそ人になして見ましや
かへし　　女五のみこ

たえぬること見れはあひぬる白雲のいこたほよそにたもはすもかな
みくしけこのにはしめて遅ひてつかはしける　あつたゝの朝臣
今日そへにくれさらめやはこたもへこもたへぬは人の心なりけり
みちかせ忍ひてまうてきけるにたやきゝつけてせい
しけれはつかはしける　大輔
いこかくてやみぬるよりはいなつまの光のまにもきみをみてしか
大輔かもこにまうてきたりけるに侍らさりけれはか
へりて又のあしたにつかはしける　朝忠朝臣
いたつらに立ちかへりにしら波のなこりに袖のひるこきもなし
かへし　大輔
何にかはそてのぬるらんしらなみの名殘ありけ（ヒイ）も見えぬこゝろを
よしふるの朝臣にさらにあはしこちかこをして又
のあしたにつかはしける　藏のないし
ちかひてもなほ思ふにはまけぬへしたかため惜きいのちならねは
忍ひてまかりけれこあはさりけれは　みちかせ
難波めにみつこはなしに芦のねのよのみしかくてあくるわひしさ
物いはんこてまかりたりけれこさきたちてむねもち
か侍りけれはやかへりねこいひいたし侍りけれは
かへるへきかたもたほえすなみた川いつれかわたる淺瀬なるらん
かへし　大輔
なみた川いかなるせよりかへりけんこゝなる澪もあやしかりしを
大輔かもこにつかはしける　敦忠朝臣

池水のいひいつることのかたけれはみこもりなから年そへにける

後撰和歌集巻第十三

戀歌五

たいしらす　　葉平朝臣

伊勢の海にあそふ蜑ともなりにしか波かきわけてみるめかつかん

かへし　　伊勢

たほろけの蜑やはかつくいせの海の波たかき浦にたふるみるめを（はイ）

つれなく見え侍りける人に　　よみひとしらす

つらしとやいひはてゝまししら露のひとに心はたかしこたもふを

題しらす

なからへは人のこゝろも見るへきにつゆのいのちそ悲しかりける

ひとりぬる時はまたるゝ鳥のねもまれにあふ夜はわひしかりけり　小町かあね

女のうらみたこせて侍りけれはつかはしける　ふかやふ

空蟬のむなしきからになるまてもわすれんこたもふ我ならなくに

あたなる男をあひしりて心さしはありこ見えなから

猶うたかはしくたほえけれはつかはしける　よみ人しらす

いつまてのはかなき人のここの葉かこゝろの秋のかせをまつらん

たいしらす

うたゝねの夢はかりなるあふここを秋の夜すからたもひつるかな

女のもこにまかりたりけるに門をさしてあけさりけ

れはまかりかへりてあしたにつかはしける　兼輔朝臣

秋のよの草のこさしのわひしきはあくれこあけぬ物にそありける

返し　よみ人しらす

いふからにつらさそまさる秋の夜の草のこさしにさはるへしやは

かつらのみこにすみはしめけるあひたにかのみこあ

ひ思はぬけしきなりけれは　さたかすのみこ

人しれすものたもふころのわか袖はあきの草葉にたこらさりけり

しのひたる人に遣しける　贈太政大臣

しつはたにたもひみたれて秋のよのあくるもしらす歎きつるかな

せうそこかよはしけれこまた遅はさりけるをここを

これかれ遅ひにけりこいひさわくをあらかはさるを

こうらみけれは　よみ人しらす

蓮葉のうへはつれなきうらにこそものあらかひはつくこいふなれ

をこのつらうなりゆくころ雨のふりけれはつかは

しける

ふりやめは跡たに見えぬうたかたのきえてはかなき世を頼むかな

女のもとにまかりてえあはてかへりて遣しける

遣はてのみあまたの夜をもかへるかな人めのしけきあふ坂にきて

女に物いふをこふたりありけりひとりにかへり事

すこき〳〵ていま一人かつかはしける

なひくかたありけるものをなよ竹のよにへぬものと思ひけるかな

をんなの心かはりぬへきをき〳〵てつかはしける

ねになけは人わらへなり呉竹のよにへぬをたにかちぬこたもはん

文つかはしける女のたやのいせへまかりけれはこも

にまかりけるにつかはしける

伊勢のあまと君しなりなはたなしくは戀しき程にみるめからせよ

一條かもとにいこなんこひしきこいひにやりたりけ

れはたにのかたをかきてやるとて　一條

こひしくは影をたにみてなくさめよ我うちとけてしのふかほなり

返し　伊勢

かけみれはいと〳〵心そまこはる〳〵ちか〳〵らぬけのうこきなりけり

人のむすめにしのひてかよひ侍りけるにつらけに見

えけれはせうそこありける返事に　よみ人しらす

人ここのうきをもしらてありかせしむかしなからの我身こもかな

見なれたる女にものいはんこてまかりたりけれこ聲

はしなからかくれたりけれはつかはしける

ほと〻きすなつきそめてしかひもなく聲をよそにもき〻渡るかな

人のもとにはしめてまかりてつとめて遣しける

常よりもたきうかりつるあかつきは露さへか〻る物にそありける

恐ひてまてきける人の霜のいたくふりけるよまから

てつとめてつかはしける

たく霜のあかつきたきをたもはすは君かよとのに夜かれせましや

返し

しもたかぬ春よりのちのなかめにもいつかは君かよかれせさりし

心にもあらて久しくこはさりける人のもとにつかはし

しける

源英明朝臣

いせの海のあまのまてかた暇なみなからへにける身をそうらむる

えかたう待りける女の家のまへよりまかりけるをみ

ていつくへいくそといひ出して待りけれは

藤原ためよ

あふことのかた野へとてそ我はゆく身をたなしなに思ひなしつ〻

題しらす

よみ人も

君かあたりくもゐにみつ〻みやち山うちこえゆかん道もしらなく

をとこの返事につかはしける

こしこ

たもふてふ言の葉いかになつかしな後うきものとたもはすもかな

たいしらす

兼茂朝臣女ィ兵衛

思ふてふことこそうけれくれ竹のよにふるひとのいはぬなけれは

よみひとしらす

たもはんと我をたのめしことの葉はわすれ草とそいまはなるらし

をこのやまひにわつらひてまからて久しくありて
つかはしける
今までもきえてありつるつゆの身はたくへき宿のあれはなりけり
かへし
ここの葉もみな霜かれになりゆけは露のやこりもあらしこそ思ふ
うらみたこせて侍りける人のかへりこに
忘れなんこいひしこにもあらなくに今はかきりこたもふ物かは
題しらす
うつゝにはふせこねられすたきかへり昨日の夢をいつかわすれん
女につかはしける
さゝらなみまなくたつなる浦をこそよにあさしこもみつゝ忘れめ
西四條の齋宮またみこに物したまひし時こゝろさし

ありてたもふここ侍りけるあひたに齋宮にさたまり
給ひにけれはそのあくるあしたに榊の枝にさしてさ
したかせける　　あつたゝの朝臣
伊勢の海のちひろの濱にひろふこも今はなにてふかひかあるへき
あさよりの朝臣のこしころせうそこかよはし侍りけ
る女のもこよりようなし今はたもひ忘れねこはかり
申て久しうなりにけれはここ女にいひつきてせうそ
こもせすなりにけれは　　本院のくら
忘れねこいひしにかなふ君なれここはぬはつらき物にそありける
たいしらす　　よみひこも
春かすみはかなくたちてわかるこも風よりほかにたれかこふへき
かへし　　伊勢

めに見えぬかせにこゝろをたくへつゝやらは霞のわかれこそせめ

土左かもとよりせうそこ侍りける返事に遣しける　さたもとのみこ

ふかみとりそめけん松のえにしあらはうすき袖にも波はよせてん

返し　土左

まつ山のすゑこす波のえにしあらは君かそてにはあとものこまらし

女のもとよりさためなき心ありなと申たりけれは　贈太政大臣

深くたもひそめつといひし言の葉はいつかあき風ふきてちりぬる

をとこの心かはるけしきありけれはたゝなりける時

此男のこゝろさせりけるあふきにかきつけてはへり

よみ人しらす

ける

ひとをのみ恨むるよりはこゝろからこれいまさらし罪とたもはん

しのひたる女のもとにせうそこ遣したりけれは

あしひきの山したしけくゆく水のなかれてかくしとはゝたのまん

をとこのわすれ侍りにけれは　伊勢

佗ひはつるときさへ物のかなしきはいつくを忍ふこゝろなるらん

たやのまもりける女をいなともせともいひはなてと

申けれは

いなせともいひはなたれすうきものは身を心ともせぬよなりけり

をとこのいかにそえまうてこぬ事といひてはへりけ

れは　よみ人しらす

こすやあらんきやせんとのみ川きしのまつの心をたもひやらなん

とまれとたもふ男の出てまかりけれは

しひてゆく駒のあしたる橋をたになこわかやこにわたさゝりけん
物いひ侍りける人の久しうたこつれさりけるからう
してまうてきたりけるになこか久しうこいへりけれ
は
年をへていけるかひなきわか身をはなにかは人にありこしられん(せィ)
いこ忍ひてまうてきたりける男をせいしける人あり
けりの〻しりけれはかへりまかりてつかはしける
あさりする時そわひしきひこしれすなにはの浦にすまふわか身は
公頼朝臣のいままかりける女のもこにのみまかりけ
れは　寛湛法師母
なかめつゝ人まつよひのよふこ鳥いつかたへこかゆきかへるらん
忍ひたる人に　よみ人しらす

人このたのみかたさは難波なるあしのうら葉のうらみつへしな
しのひてかよひ侍りける人いまかへりてなこたのめ
たきてたほやけのつかひに伊勢の國にまかりて歸り
まうてきて久しうこはすはへりけれは　少將内侍
ひこはかる心のくまはきたなくてきよきなきさをいかてすきけん
かへし　兼輔朝臣
たかためにわれかいのちをなか濱のうらに宿りをしつゝかはこし
女のもこにつかはしける　よみひこしらす
せきもあへす淵にそまこふ(よイ)涙かはわたるてふ瀬をしるよしもかな
かへし
淵なからひこかよはさしなみた川わたらはあさきせをもこそ見れ(せもこそは見めィ)

常にまうてきつゝ物なごいふひごの今はなまうてこ
そ人もうたていふなりごいひ出して侍りけれは
きてかへる名をのみそたつから衣したゆふひものこゝろごけねは
左大臣河原にいてあひて侍りけれは　内侍たひらけいこ

たえぬごも何れもひけんなみた川なかれあふせもありけるものを
大輔につかはしける　左大臣

今ははやみやまをいてゝほごゝきすけちかき聲をわれにきかせよ
かへし

ひごはいさ深山かくれのほごゝきすならはぬ里はすみうかるへし
左大臣につかはしける　中務

ありしたに憂かりし物をあはすごていつこにそふるつらさなるらん

右近につかはしける　左イ右大臣

たもひわひ君かつらきにたちよらは雨もひご目ももらさゝらなん
たかあきらの朝臣に文つかはすごて　よみ人不知

笛竹のもごのふるねはかはるごも己かよゝにはならすもあらなん
こご女に物いふごきゝてもごのめの内侍のふすへは
へりけれは　よしふるの朝臣

めも見えすなみたの雨のしくるれは身のぬれ衣はひるごきもなし
かへし　中將内侍

にくからぬ人のきせけんぬれきぬはたもひにあへす今かわきなん
たいしらす　小野道風

大かたはせごたにかけしあまのかはふかきこゝろを淵ごたのまん

かへし　　よみ人しらす

ふちこてもたのみやはする天のかはこしにひこたひわたるてふ瀬を
みくしけこの〳〵へたうにつかはしける

身のならんことをもしらすこく舟は波のこ〳〵ろもつ〳〵まさりけり　　きよかけの朝臣

ここいてきてのちに京極の御息所につかはしける

わひぬれは今はたたなし難波なるみをつくしてもあはんこそ思ふ　　もこよしのみこ

忍ひてみくしけこの〳〵へたうにあひかたらふこき〳〵

て父の左大臣のせいし侍りけれは　　敦忠朝臣

いかにてかはいかくしてかくたもふてふことをたに人つてならて君にかたらん

公頼朝臣のむすめに忍ひてすみ侍りけるにわつらふ

ことありてしぬへしこいへりけれは遣しける　　あさた〳〵の朝臣

もろともにいさこいはすはしての山こゆこもこさん物ならなくに

年をへてかたらふ人のつれなくのみ侍りけれはうつ

ろひたる菊につけてつかはしける　　きよかけの朝臣

かくはかり深きいろにもうつろふをなほ君きくのはなこいはなん

人のもこにまかりたりけるにかこよりのみかへしけ

るにからうしてすたれのもこによひよせてかうてさ

へや心ゆかぬこいひいたしたりけれは　　よみひこしらす

いさやまた人のこ〳〵ろもしらつゆのたくにもこにも袖のみそひつ

ひこのもこにまかりけるをあはてのみかへし侍りけ

れはみちよりいひつかはしける

よる汐のみちくる空もたもほえすあふことなみにかへるこ思へは

人をたもひかけていひわたり侍りけるをまちこほに

のみ侍りけれは

數ならぬ身はやまのはにあらねこもたほくの月をすくしつるかな

ひさしういひわたり侍りけるにつれなくのみはへり

けれは　　なりひらの朝臣

たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬこゝろを人はしらなん

かへし　　伊勢

夏むしのしる〳〵まこふたもひをはこりぬかなしこ誰かみさらん

返事せぬ人につかはしける　　よみひこしらす

うちわひてよはゝん群に山ひこのこたへぬやまはあらしこそ思ふ

返し

山ひこのこゑのまに〳〵こひゆかはむなしき空にゆきやかへらん

かくいひつかはす程にみこせはかりになり侍りにけれ

は

あらたまのこしのみこせは空蟬のむなしきねをやなきてくらさん

たいしらす

なかれ出るなみたの川のゆくすゑはつひにあふみの海こたのまん

雨のふりける日人につかはしける

雨ふれこふらねこぬるゝわか袖のかゝるたもひにかわかぬやなそ

かへし

つゆはかりぬるらん袖のかわかぬは君かたもひのほこやすくなき

女のもこにまかりたりけるにたちなからかへしたれ

は道よりつかはしける

つねよりもまごふ〳〵そかへりつるあふみちもなき宿にゆきつゝ

雨にもさはらすまてきて空物かたりなこしける男の

門よりわたるこて雨のいたくふれはなんまかりすき

ぬるこいひけれは

濡れつゝもくるこ見えしは夏引のてひきにたへぬ糸にやありけん

人にわすられて待りける時

かすならぬ身はうき草こなりなゝんつれなき人によるへしられし

たもひわすれにける人のもこにまかりて

夕やみはみちも見えねこふるさこはもここし駒にまかせてそくる

かへし

こまにこそまかせたりけれあやなくも心のくるこたもひけるかな

朝綱の朝臣の女に文なこつかはしけるをここ女にい

ひつきて久しうなりて秋こふらひて待りけれは

いつかたにここつてやりて雁かねのあふここまれに今はなるらん

をここのかれはてぬにここ男をあひしりて待りける

にもこの男のあつまへまかりけるをきゝて遣しける

ありこたに聞くへきものをあふ坂の關のあなたそはるけかりける

かへし

關もりのあらたまるてふあふさかのゆふつけ鳥はなきつゝそゆく

また女のつかはしける

ゆきかへり來てもきかなん逢さかのせきにかはれる人もありやこ

かへし

もる人のあるこはきけこあふさかのせきもこゝめぬ我なみたかな

かれにける男のたもひ出てまてきてものなこいひて
かへりて

葛城やくめ路にわたすいはゝしのなか〳〵にてもかへりぬるかな
かへし

なかたえてくる人もなきかつらきのくめちの橋はいまもあやふし
しろききぬこもきたる女こものあまた月あかきに侍
りけるを見てあしたにひこりかもこへつかはしける

藤原有好

しら雲のみなひこむらに見えしかこたち出て君をたもひそめてき
女のもこにつかはしける　よみひこしらす

よそなれこ心はかりはかけたるをなこかたもひにかわかさるらん
たいしらす

我こひのきゆるまもなく苦しきは逢はぬなけきやもえわたるらん
かへし

きえすのみ燃ゆる思はこほけれこ身もこかれぬる物にそありける
又をここ

上にのみたろかにもゆるかやり火のよにも底にはたもひこかれし
又返し

かはこのみ渡るをみるになくさまて苦しきここそいやまさりなる
またをここ

水まさるこゝちのみして我ためにうれしきせをは見せしこやする

後撰和歌集巻第十四

戀歌六

人のもとにつかはしける　よみ人しらす

あふ事をよゝにありてふみつのもりつらしゝ人をみつるころかな

かへし

みつのもりもる此ころのなかめにはうらみもあへすよゝの川なみ

みつからまてきてよもすから物いひ侍りけるに程も

なくあけ侍りけれはまかりかへりて

うき世ゝはたもふ物から天の戸のあくるはつらき物にそありける

女のもゝにつかはしける

うらむれこ戀ふれこ君かよこゝもにしらす顔にてつれなかるらん

かへし

恨むこもこふこもいかゝ雲ゐよりはるけきひこをそらにしるへき

いひわつらひてやみにける人に久しうありてまたつかはしける

しつはたにへつるほこなりしら糸のたえぬる身こは思はさらなん

かへし

へつるよりうすくなりにし職機のいこは絶えてもかひやなからん

をここのまてきてすきこことをのみしけれは人やいかか見るらんこて

くることは常ならすこもたま葛たのみはたえしこたもほゆるかな

かへし

玉かつら頼めくるひの數はあれこたえ〳〵にてはかひなかりけり

をここの久しうたこつれさりけれは

いにしへの心はなくやなりにけんたのめしここの絶えてこしふる

返し

いにしへも今もこゝろのなけれはそうきをもしらて年をのみふる

男のたゝなりけるをりには常にまてきけるか物いひてのちはかこよりわたりけれこまてこさりけれは

絶えさりしむかしたに見しうき橋をいまは渡るこたこにのみきく

いひわたりて二年はかりたこもせすなりにける男の五月はかりにまてきて年ころ久しうありつるなこいひてまかりにけるに

わすられてこしふる里のほこゝきすなにゝひこ聲なきてゆくらん

たいしらす

こふやこて杉なきやこにきにけれこ戀しきここそしるへなりける

物いひわひて女のもこにつかはしける

霧のいのちいつこもしらぬ世の中になこかつらしこ思ひたかるゝ

女のほかに侍りけるをそこにこをしふる人も侍らさりけれは心つからこふらひて侍りける返事につかはしける

かり人のたつぬる鹿はいなみ野にあはてのみこそあらまほしけれ

しのひたる女のもこよりなこかたこもせぬこまうし

たりけれは　右大臣

小山田のみつならなくにかくはかり流れそめてはたえんものかは

をここのまうてこてありゝて雨のふる夜たほ笠を

こひにつかはしたりけれは　これひらの朝臣の女いまき

月にたにまつ程たほくすきぬれは雨もよにこしこたもほゆるかな

はしめて人につかはしける　よみ人しらす

たもひつゝまたいひそめぬ我戀をたなしこゝろにしらせてしかな

いひわつらひてやみにけるを又たもひ出てこふらひ

侍りけれはさためなき心かなこいひてあすか川の心

をいひつかはして侍りけれは

あすか川こゝろのうちになかるれは底のしからみいつかよこまん

たもひかけたる女のもこに　あさよりの朝臣

富士のねをよそにそきゝし今はわか思ひにもゆるけふりなりけり

返し　よみ人しらす

しるしなきたもひこそきくふしの峯もかここはかりの烟なるらん

いひかはしける男のむやいこいたうせいすごきゝて
女のいひつかはしける
いひさしてこゝめらるなる池水のなみいつかたにたもひよるらん
たなし所に侍りけるひこの思ふ心はへりけれこいは
て忍ひけるをいかなる折にかありけんあたりにかき
てたこせりける
しられしな我ひこしれぬこゝろもてきみをたもひの中にもゆこも（はゝ）
心さしをはあはれこたもへこ人めになんつゝむこい
ひて侍りけれは
逢ふはかりなくてのみふるわか戀を人目にかくるこのわひしさ
題しらす
なつころも身にはなるこも我ためにうすき心はかけすもあらなん

いかにしてここ語らはんほこゝきすなけきの下になけはかひなし
思ひつゝへにけるこしをしるへにてなれぬる物はこゝろなりけり
文なこつかはしける女のここ男につき侍りけるにつ
かはしける　源こゝのふ
我ならぬ人すみの江のきしに出てなにはのかたをうらみつるかな
こゝのふかれかたになり侍りにけれはこゝめたきた
る笛をつかはすこて　よみ人しらす
にこりゆく水には影のみえはこそあしまよふえをこゝめても見め
菅原のたほいまうちきみの家に侍りける女にかよひ
侍りける男中たえて又こひて侍りけれは
すかはらやふしみの里のあれしよりかよひし人のあこもたえにき
女のをここをいこひてさすかにいかゝたほえけんい

へりける

千はやふる神にもあらぬ我なかのくもゐはるかになりもゆくかな

返し

ちはやふるかみにも何かたこふらんたのれ雲ゐにひこをなしつゝ

女三のみこに　　あつよしのみこ

浮きしつみ淵瀬にさわくにほ鳥のそこものこかにあらしこそ思ふ

かうちィ

かひに人の物いふこきゝて　　藤原守文

まつ山になみたかき音そきこゆなる我よりこゆるひこはあらしを

をここのもこに雨ふる夜かさをやりてよひけれここ

さりけれは　　よみ人しらす

さしてここにもひしものをみかさ山かひなく雨のもりにけるかな

かへし

もるめのみあまた見ゆれは三笠山しる〳〵いかてさしてゆくへき

女のもこよりいこいたくなたもひわひそこたのめに

こせて待りけれは

なくさむるここの葉にたにかゝらすは今もけぬへき露のいのちを

もこよしのみこのみそかにすみ侍りけるころ今こん

こたのめてこすなりにけれは　　兵衛

人しれすまつにねられぬありあけの月にさへこそあさむかれけれ

忍ひてすみ侍りける人のもこよりかゝるけしき人に

みすなこいへりけれは　　元方

立田川たちなはきみか名ををしみいはせの社のいはしこそたもふ

宇多院に侍りける人にせうそこつかはしける返事も

はへらさりけれは　　よみ人しらす

うたの野はみゝなし山かよふこゝりよふ聲にさへこたへさるらん

返し　　宇多院の女王のみこ

耳なしのやまならすこもよふこ島なにかはきかんこきならぬねを

つれなく侍りける人に　　たゝみね

こひわひてしぬてふ事はまたなきに世のためしにもなりぬへき哉

たちよりけるに女にけていりけれは遣しける　　よみひこしらす

影みれはたくにいりぬる君によりなこかなみたのこへはいつらん

あひにける女のまたあはさりけれは

しらさりし時たにこえしあふさかをなこいまさらに我まこふらん

女のもこにまかりそめてあしたに　　かけもこ

あかすしてまくらの上にわかれにし夢路をまたもたつねてしかな

をこのこはすなりにけれは　　よみひこしらす

音もせすなりもゆくかなすゝか山こゆてふ名のみたかくたちつゝ

かへし

こえぬてふ名をなうらみそ鈴鹿山いこゝまちかくならんこ思ふを

女に物いはんこてきたりけれここと人にものいひけ

れはかへりて

我ためにかつはつらしこみやま木のこりこもこりぬかゝる憑せし

かへし

あふこなき身こはしる〳〵憑すこてなけきこりつむ人はよきかは

人に遣しける　　かいせん法師

朝ここにつゆはたけこも人こふるわかここの葉はいろもかはらす

きて物いひける人のたほかたむつましかりけれこち

かうはえあはすして　　よみ人しらす

ま近くてつらきを見るはうけれともうきはものかは憑しきよりは

女のもとにつかはしける　　藤原さねたゝ

つくしなるたもひそめ川わたりなは水やまさらんよこむこきなく

かへし　　よみ人しらす

渡りてはあたになるてふそめ川のこゝろつくしになりもこそすれ

をこのもとより花さかりにこんといひてこさりけれは

花さかりすくしゝ君はつらけれこゝの葉をさへかくしやはせん

をこの久しうこはさりけれは　　右近

こふこをまつに月日はこゆるきのいそにやいてゝ今はうらみん

あひしりて侍りける人のもとに久しうまからさりけれはわすれ草何をかたねこたもひしはこいふ事をい

ひつかはしたりけれは　　よみひこしらす

忘れくさ名をもゆゝしみかりにてもたふてふ宿はゆきてたにみし

返し

うきこのしけきやこにはわすれ草うゑてたにみし秋そわひしき

女こもろこもに侍りて

數しらぬたもひはきみにある物をたきこころなきこゝちこそすれ

返し

たきこころなき思ひこしきゝつれは我にいくらもあらしこそ思ふ

元長のみこに夏のさうそくしてたくるこてそへたり

南院式部卿のみこの女

ける

我たちてきるこそうけれ夏ころもたほかたこのみ見へきうすさを

久しうこはさりける人のたもひ出てこよひまてこん
かこさゝてあひまてこ申てこさりけれは

よみ人しらす

やへむくらさしてしかこを今さらに何にくやしくあけてまちけん
人をいひわつらひてここ人にあひ待りてのちいかゝ
ありけんはしめの人にたもひかへりてほこへにけれ
は文はやらすして扇にたかさこのかたかきたるにつ
けてつかはしける

源庶明朝臣

さをしかのつまなき嶺をたかさこのをのへの小松きゝもいれなん

返し

よみひこしらす

さを鹿の聲たかさこにきこえしは妻なきこきのねにこそありけれ
たもふ人にえ逢ひ待らてわすられにけれは

せきもあへす涙のかはの瀬をはやみかゝらん物こたもひやはせし

たいしらす

瀬をはやみたえすなかるゝ水よりも絶せぬものは嶺にそありける
こふれこもあふ夜なき身はわすれ草夢ちにさへやたひしけるらん
世の中のうきはなへてもなかりけりたのむかきりそ恨みられける

たのめたる人に

夕されはたもひそしけきまつ人のこんやこしやのさためなけれは

女につかはしける

源よしの朝臣

いこはれてかへりこしちの白山はいらぬにまこふ物にそありける

たいしらす

よみ人も

人なみにあらぬわか身はなにはなる芦のねのみそしたになかるゝ
しら雲のゆくへきやまはさたまらすたもふかたにも風はよせなん

世のなかになほあり明のつきなくて暗にまどふをとはぬつらしな
さたまらぬ心ありと女のいひけれは遣しける

贈太政大臣

あすか川せきてゝむるものならは淵せになるとなさかいはれん
久しうまかりかよはすなりにけれは十月はかりに雪
のすこしふりたるあしたにいひ侍りける

右近

身をつめはあはれとそたもふ初雪のふりぬるこゝも雑にいはまし
源たゝあきらの朝臣十月はかりにこゝなつを折りて
たくり侍りけれは　よみ人しらす
冬なれときみかかきねにさきたれはうへこゝなつに戀しかりけり
女のうらむるこゝありてたやのもゝにまかりわたり
て侍りけるに雪のふかくふりて侍りけれはあしたに
女のむかへに車つかはしけるせうそこにくはへてつ
かはしける　かねすけの朝臣

しら雪のけさはつもれるたもひかな遣はてふるよの程もへなくに
かへし　よみ人しらす

白ゆきのつもるたもひもたのまれす春よりのちはあらしと思へは
心さし侍る女みやつかへし侍りけれは遣事かたくは
へりけるをゆきの降るにつかはしける

わかこひし君かあたりをはなれねはふるしらゆきも空にきゆらん
かへし

山かくれきえせぬ雪のわひしきはきみまつの葉にかゝりてそふる
物いひ侍りける女に年のはてのころほひつかはしけ

る

あらたまの年はけふあすこえぬへしあふさか山をわれやたくれん

藤原ときふる

後撰和歌集巻第十五

雜歌一

仁和のみかどさかの御時の例にてせり川に行幸した

まひける日　在原行平朝臣

さかの山みゆきたえにしせり川のちよのふるみちあとはありけり

たなし日たかゝひにてかりきぬにつるのかたをぬひてかきつけたりける

たきなさひ人なとかめそ狩ころもけふはかりこそたつもなくなる

行幸のまたの日なん致仕の表たてまつりける

きのとものりまたつかさ給はらさりける時こしのつ

いて侍りて年はいくらはかりにかなりぬるこゝひ侍
りけれは四十餘りなんなりぬるこ申けれは
贈太政大臣

今までになこかは花のさかすしてよそこせあまりこしきりはする
返し
こものり

はる〳〵の數はわすれすありなからはなさかぬ木を何にうゑけん
外吏にしは〳〵まかりありきて殿上たりて侍りける
こき參輔朝臣のもこにたくり侍りける
平なかき

よこゝもに岑へふもこへたりのほりゆく雲の身は我にそありける
またきさきになり給はさりける時かたはらの女御た
ちそねみ給ふけしきなりけるこきみかこ御さうしに
恐ひてたちより給へりけるに御たいめんはなくてた
てまつりたまひける
嵯峨后

こゝしけししはしはたてれ宵のまにたけちん露はいてゝはらはん
家に行平朝臣まうてきたりけるに月のたもしろかり
ける夜さけなこたうへてまかりたゝんこしけるほこ
に
河原左大臣

照るつきを正木のつなによりかけてあかすわかるゝ人をつなかん
かへし
行平朝臣

かきりなき思ひのつなのなくはこそ正木のかつらよりもなやまめ
世中をたもひうして侍りけるころ　業平朝臣

すみわひぬ今はかきりこやまさこにつま木こるへき宿もこめてん
我をしりかほにないひそこ女のいひて侍りける返事

に

足ひきのやまにたひたるしらかしのしらしな人をくち木なりこも　みつね

はちすのはひをこりて　よみ人しらす

はちす葉のはひにそ人はたもふらん世にはこひちの中にたひつゝ

すかたあやしこ人のわらひけれは

伊勢の海のつりのうけなるさまなれこふかき心はそこにしつめり

たほきたほいまうちきみの白河の家にまかりわたり

て侍りけるに人のさうしにこもりて　中務

しらかはの瀧のいこ見まほしけれこみたりに人はよせしものをや

かへし　たほきたほいまうちきみ

白河のたきのいこなみみたれつゝよるをそひこはまつこいふなる

あふ坂の關に庵室をつくりてすみ侍りけるにゆきか

ふひこを見て　蟬丸

これやこのゆくもかへるも別れつゝしるも知らぬもあふさかの關

さためたる男もなくてものたもひけるころ　小野小町

あまのすむ浦こくふねのかちをなみ世をうみわたる我そかなしき

あひしりて侍りける女心にもいれぬさまに侍りけれ

はここ人の心さしあるにつき侍りけるをなほしもあ

らす物いはんこ申つかはしたりけれこ返事もせす侍

りけれは　よみ人しらす

濱ちこりかひなかりけりつれもなき人のあたりはなきわたれこも

法皇寺めくりし給ひける道にて楓の枝を折りて

このみゆき千年かへても見てしかなかゝる山ふしごきにあふへく
　　素性法師

西院のささきたほんくしたろさせ給ひてたこなはせ
たまひける時かの院の中島の松をけつりてかきつけ
侍りける

音にきくまつかうら島けふそ見るうへもこゝろあるあまのすみけり（はイ）
　　右衛門

齋院のみそきの垣下に殿上の人々まかりてあかつき
にかへりてうまかもこにつかはしける

我のみはたちもかへらぬあかつきにわきてもたける袖のつゆかな
　　たゝみ

しほなき年たゝみあへてこ侍りけれは

塵こいへはなくてもかからき世中にいかてあへたるたゝみなるらん
　　藤原元輔

ひたゝれこひにつかはしけるにうらなんなきそれは
きしこやいかゝこいひたれは

すみよしのきしこはいはし沖つ波なほうちかけようらはなくこも
法皇はしめてたほんくしたろし給ひて山ふみしたま
ふあひたきさきをはしめ奉りて女御更衣なほひこつ
院にさふらひ給ひける三こせこいふになんみかこか
へりたはしましたりけるむかしのここたなし所にて
たほんくしたろしたまひけるついてに
　　七條のきさき

言の葉にたえせぬ露はたくらんやむかしたほゆるまこゐしたれは
　　伊勢

御返し

うみこのみまこゐの中はなりぬめりそなからあらぬ影のみゆれは

しかのからさきにてはらへしける人のしもつかへに

みるこいふ侍りけり大伴のくろぬしそこにまてきて

かのみるに心をつけていひたはふれけりはらひはて

てくるまよりくろぬしに物かつけゝり其ものこしに

かきつけてみるにたくりはへりける

くろぬし

なにせんにへたのみるめを思ひけんたきつ玉藻をかつく身にして

月のたもしろかりけるを見て　みつね

ひるなれや見そまかへつる月影をけふこやいはん昨日こやいはん

五節のまひ姫にてもしめしこゝめらるゝこゝやある

こたもひはへりけるをさもあらさりけれは

くやしくそあまつをこめこなりにける雲ちたつぬる人もなきよに

藤原敏包かむすめ

太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるしし侍り

ける日中将にてまかりて事をはりてこれかれまかり

あかれけるにやんことなきひと二三人とゝめてまら

うこあるしさけあまたゝひの後ろひにのりて子とも

のうへなと申けるついてに　兼輔朝臣

人のたやの心はやみにあらねとも子をたもふ道にまこひぬるかな

女ともたちのもとにつくしよりさしくしをこゝろさ

すこて　大江玉淵朝臣のむすめ

なにはかた何にもあらすみをつくし深きこゝろのしるしはかりそ

元長のみこすみ侍りける時てまさくりに何いれて侍

りける箱にかありけん下たひしてゆひてまたこん時
にあけんとて物のかみにさしたきて出て侍りにける
後つねあきらのみこにとりかくされて月日ひさしく
はへりてありし家に歸りて此箱を元長のみこにたく
るとて　　中務

あけてたに何にかはせんみつの江のうら島のこをたもひやりつゝ

忠房朝臣つのかみにて新司はるかたかまうけに屏風
てうしてかの國の名ある所々ゑにかゝせてさひ江と
いふ所にかけりける　　たゝみね

年をへてにこりたにせぬさひ江には玉もかへりていまそすむへき

兼輔朝臣宰相中將より中納言になりて又のとしのり
弓のかへりたちのあるしにまかりてこれかれたもひ

をのふるついてに　　兼輔朝臣

ふるさとのみかさの山はとほけれと聲はむかしのうとからぬかな

あはちのまつりこゝひとこの任はてゝのほりまうてき
てのころかねすけの朝臣のあはたの家にて　　みつね

ひきうゑし人はうへこそたいにけれ松のこたかくなりにけるかな

人のむすめに源のかねきかすみ侍りけるを女のはゝ
きゝ侍りていみしうせいし侍りけれは忍ひたるかた
にてかたらひけるあひたに母しらすしてにはかにい
きけれはかねきかにけてまかりけれは遣しける　　女のはゝ

小山田のたゝろかしにもこさりしをいとひたふるにけし君かな

三條右大臣みまかりてあくる年のはる大臣めしあり
ときゝて齋宮のみこにつかはしける　むすめの女御

いかてかの年きりもせぬたねもかなあれたる宿にうゑてみるへく
かの女御左のたほいまうちきみにあひにけりときゝ
てつかはしける　齋宮のみこ

春ことにゆきてのみ見ん年きりもせすこいふ種はたひぬとかきく
庶明朝臣中納言になり侍りける時うへのきぬをつか
はすとて　右大臣

たもひきや君かころもをぬきかへてこきむらさきの色をきんとは
かへし　もろあきらの朝臣

いにしへも契りてけりなうちはふきとひだちぬへき天のはころも

まさたゝかこのゐものをとりたかへて大輔かもとに
もてきたりけれは　大輔

古さとのならのみやこのはしめより馴にけりとも見ゆるころもか
返し　まさたゝ

ふりぬとて思ひもすてし唐ころもよそへてあやなうらみもそする
世の中の心にかなはぬなと申けれは行さきたのもし
き身にてかゝる事あるましと人の申けれは　大江千里

流れてのよをはたのます水のうへの泡にきえぬるうきみと思へは
藤原のさねきかくらうとよりかうふりたまはりてあ
す殿上たりんとしける夜さけたうへけるついてに　兼輔朝臣

ぬはたまの今宵はかりそあけころもあけなは君をよそにこそみめ

法皇御くしたろし給ひてのころ　七條后

人わたすことたになきをなにしかもなからの橋と身のなりぬらん

御かへし　伊勢

ふる〻身はなみたの中にみゆれはや長柄のはしにあやまたるらん

京極のみやす所あまになりて戒うけんとて仁和寺に

わたりて侍りけれは　あつみのみこ

ひとりのみなかめて年をふる里のあれたるさまをいかに見るらん

女のあたなりといひけれは　あさつなの朝臣

まめなれとあた名はたちぬたはれ島よるしら波をぬれきぬにきて

あひかたらひける人の家のまつの梢のもみちたりけ

るを見て　よみ人しらす

年をへてたのむかひなしときはなる松のこすゑのいろかはりゆく

男の女の文をかくし侍りけるをみてもこのめのかき

つけ侍りける　四條御息所のむすめ

へたてける人のこゝろのうき橋をあやふきまてもふみ見つるかな

小野好古朝臣にしの國のうての使にまかりて二年と

いふとし四位にはかならすまかりなるへかりけるを

さもあらすなりにけれはかゝることにしもさゝれに

けることのやすからぬよしをうれへたくりて侍りけ

る文の返事のうらにかきつけてつかはしける　源公忠朝臣

玉くしけふたとせあはぬ君かみをあけなからやはあらんと思ひし

かへし　小野好古朝臣

あけなから年ふることは玉くしけ身のいたつらになれはなりけり

後撰和歌集巻第十六

雜歌二

たもふ心ありて前太政大臣によせて侍りける　　在原業平朝臣

頼まれぬうき世のなかを歎きつゝ日かけにたふる身をいかにせん

やまひし侍りてあふみのせき寺にこもりて侍りける

にまへの道より閑院のこ石山にまうてけるをたゝ今

なん行きすきぬるこ人のつけ侍りけれはたひてつか

はしける　　こしゆきの朝臣

あふ坂のゆふつけになく鳥のねをきゝこかめすそゆきすきにける

前中宮の宣旨贈太政大臣の家よりまかり出てあるに
彼家にことにふれて日くらしこいふ事なん侍りける
宣旨

深山よりひゝききこゆるひくらしの聲をこひしみいまもけぬへし
贈太政大臣

返し

ひくらしの聲をこひしみけぬへくはみ山ほとりにはやもきねかし
あつたゝの朝臣の母

河原に出て祓し侍りけるにたほいまうちきみもいて
あひ侍りけれは

ちかはれしかもの川原にこまとめてしはし水かへかけをたに見ん
人のうしをかりて侍りけるにしに侍りけれはいひつ、
かはしける
閑院のこ

我のりしことをうしこやきえにけんくさ葉にかゝる露のいのちは

延喜御時賀茂臨時祭の日御前にてさかつきとりて
三條右大臣

かくてのみやむへきものかちはやふるかものやしろの萬代を見ん
たなし御時北野の行幸にみこしをかにて
枇杷左大臣

みこし岡いくそのよゝに年をへてけふのみゆきをまちてみつらん
戒仙かふかき山寺にこもり侍りけるにこゝ法師まう
てきて雨にふりこめられてはへりけるに
よみ人しらす

いつれをか雨ともわかん山ふしのたつるなみたも降りにこそふれ
これかれあひて夜すからものかたりしてつゝめてた
くり侍りける
たきかせ

思ひにはきゆるものそこしりなから今朝しもたきて何にきつらん
わかう侍りける時は志賀につねにまうてけるをこし
老いてはまゐりはへらさりけるにまゐり侍りて
よみ人しらす

めつらしやむかしなからの山の井はしつめる影そくちはてにける
宇治のあしろにしれる人の侍りけれはまかりて
大江興俊

うち川のなみにみなれしきみませは我もあしろによりぬへきかな
院のみかこ内にたはしましゝこき人々に扇てうせさ
せたまひける奉るとて
小貳のめのこ

吹きいつるねこころたかくきこゆなりはつ秋風はいさてならさし
返し
大輔

こゝろしてまれに吹きつる秋かせをいふなれは山たろしにはなさしこそ思ふ
をここの文たほくかきてこいひけれは
よみ人しらす

はかなくて絶えなんくもの糸ゆゑに何にかたほくかゝんこすらん
くらまの坂をよるこゆこてよみ侍りける
亭子院にいまあここめしける人

むかしよりくらまの山こいひけるはわかここ人もよるやこえけん
男につけてみちのくにへむすめをつかはしたりける
に其をここ心かはりたりこきゝて心うしこたやのい
ひつかはしたりけれは
よみ人しらす

雲ゐちのはるけきほこのそらここはいかなる風のふきてつけゝん
かへし
女のはゝ

あまくものうきたる事ときゝしかどなほそこゝろは空になりにし

たまさかにかよへりける文をこひかへしけれはその

文に具してつかはしける　もこよしのみこ

やれはをしやらねは人にみえぬへしなく〳〵も猶かへすまされり

延喜御時御馬をつかはしてはやくまゐるへきよしに

ほせつかはしたりけれはすなはちまゐりてたほせ事

うけたまはれる人に遣しける　素性法師

もち月のこまよりたそくいてつれはたゝる〳〵そやまはこえける

やまひして心ほそしこて大輔につかはしける

よろつよゝ契りしことのいたつらに人わらへにもなりぬへきかな　藤原あつこし

返し　大輔

かけていへはゆゝしき物を萬代ゝちきりしことやかなはさるへき

裳のふるを袖にうけてきえけるを海のほとりにて　よみ人しらす

散るゝみて袖にうくれゝたまらぬはあれたる波の花にそありける

ある所のわらは女五節見に南殿にさふらひてくつを

うしなひてけりすけむこの朝臣くら人にてくつをか

して侍りけるをかへすゝて

たちさわく波まをわけてかつきてし沖のもくつをいつかわすれん

かへし　輔臣朝臣

かつきてしたきの藻くつを忘れすはそこのみるめを我にからせよ

人の裳をぬはせ侍るにぬひてつかはすゝて

よみ人しらす

かきりなくたもふ心はつくは峯のこのもやいかゝあらんとすらん
をとこのやまひしけるをとふらはてあり〳〵てやみ
かたにとへりけれは
思ひいてゝとふ言の葉をたれみまし身のしら雲となりなましかは
みそかをとこしたる女をあらくはいはてとへと物も
いはさりけれは
わすれなんとたもふ心のつくからに言の葉さへやいへはゆゝしき
男のがくれて女をみたりけれはつかはしける
かくれゐて我うきさまを水のうへの泡ともはやくたもひきえなん
世中をとかくたもひわつらひけるほとに女ともたち
なる人なほ我いはんことにつきねとかたらひはへり
けれは

人こゝろいさやしらなみたかけれはよらんなきさそかねて悲しき
いたくこゝこのむよしを時のひとのいふときゝて　高津内親王
なほき木にまかれる枝もあるものをけをふき疵をいふかわりなさ
帝にたてまつりたまひける　嵯峨后
うつろはぬ心のふかくありけれはこゝちる花はるにあへることこ
これかれ女のもとにまかりて物いひなとしけるに女
のあなさむの風やと申けれは　よみ人しらす
玉たれのあみめのまよりふくかせの寒くはそへていれんたもひを
をとこの物いひけるをさわきけれはかへりてあした
に遣しける
しら波のたちさわかれて立ちしかは身をうしほにそ袖はぬれにし

かへし

こりもあへすたちさわかれしあた波にあやしや何に袖のぬれけん

題しらす

たゝちこも頼まさらなん身にちかきころもの關もありといふなり

友たちの久しくあはさりけるにまかりてあひてよみ

待りける

逢はぬまはこひしき道もしりにしをなこ塘しきにまこふこゝろそ

題しらす

いかなりし節にか糸のみたれけんしひてくれこもこけす見ゆるは

人のめにかよひける見つけられて　賀朝法師

身なくこも人にしられし世のなかにしられぬ山をしるよしもかな

返し

もこのをここ

よの中にしられぬ山にみなくこもたにのこゝろのいはてたもはん

山の井のきみにつかはしける　よみ人しらす

たこにのみきゝてはやまし淺くこもいさくみ見てん山のゐのみつ

やまひしけるをからうしてたこたれりこきゝて

しての山たこる〈もこえなくてうき世のなかになにかへるらん

たいしらす

數ならぬみをもちにゝてよしの山たかきなけきをたもひこりぬる

かへし

よしのやまこえん事こそかたからめこらんなけきの數はしりなん

陽成院のみかこ時々このゐにさふらはせたまひける

を久しうめしなかりけれはたてまつりける

武藏

かすならぬ身にたく宵のしら玉はひかり見えさす物にそありける
まかりかよひける女のこゝろごけすのみ見えはへり
けれは年月もへぬるをいまさらかゝるこゝいひつ
かはしたりけれは　よみ人しらす
難波かたみきはのあしのたひ風にうらみてそふるひとのこゝろを
女のもとよりうらみたこせて侍りける返事に
わするゝはうらみさらなんはし鷹のとかへる山のしひはもみちは
むかしたなし所に宮つかへし侍りける女のをとこに
つきて人の國にたちゐたりけるをきゝつけてこゝろ
ありけるひとなれはいひつかはしける
をちこちの人めまれなるやまさとに家ゐせんとはたもひきやきみ
かへし

身をうしとひとしれぬよを尋ねこし雲のやへたつ山にやはあらぬ
をとこなと侍らすして年ころやま里にこもり侍りけ
る女をむかしあひしりて侍りける人道まかりけるつ
いてに久しうきこえさりつるをこゝになりけりとて
いひいれて侍りけれは　土左
あさなけに世のうきことを忍ひつゝなかめせしまに年はへにけり
山さとに侍りけるにむかしあひしれる人のいつより
こゝにはすむそとひけれは　閑院
春やこしあきやゆきけんたほつかな蔭のくち木ごよをすくす身は
題しらす　貫之
よの中はうきものなれや人ごとのごにもかくにもきこえくるしき
よみ人しらす

むさし野は袖ひつはかりわけしかこわかむらさきは尋ねわひにき

いこまにてこもりゐて侍りけるころ人のこはすはへりけれは　壬生忠岑

大あらきのもりの草こやなりにけんかりにたにきてこふ人のなき

ある所にみやつかへし侍りける女のあた名たちける

かもこよりたのれかうへはそこになんくちのはにかけていはるなこうらみて侍りけれは　よみ人しらす

あはれてふこここそつねの口のはにかゝるや人をたもふなるらん

たいしらす　伊勢

吹く風のしたのちりにもあらなくにさもたちやすき我うきなかな

春日にまうてける道にさほかはのほこりに初瀬より

かへる女車のあひて侍りけるに簾のあきたるよりは

つかにみいれけれはあひしりてはへりける女のこゝ

ろさしふかく思ひかはしなからはゝかる事はへりて

あひはなれて六七年はかりになりにける女に侍りけ

れはかの車にいひいれて侍りける　閑院左大臣

ふるさとのさほの川水けふもなほかくてあふせはうれしかりけり

枇杷左大臣よう侍りてならの葉をもこめ侍りけれは

ちかぬかあひしりて侍りける家にこりにつかはした

りけれは　さしこ

我やこをいつならしてかならの葉のならし顔にはをりにたこする

かへし　枇杷左大臣

ならの葉のはもりの神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな

友たちのもとにまかりてさかつきあまた〳〵ひになり
にけれはにけてまかりにけるをこ〳〵めわつらひても
て侍りける笛をこりこ〳〵めて又のあしたに遣すこて
よみ人しらす

かへりてはこゑやたかはん笛竹のつらき一夜のかたみこたもへは
かへし

一ふしにうらみなはてそふえ竹の群のうちにもたもふこ〳〵ろあり
もとより友たちに侍りけれは貫之にあひかたらひて
兼輔朝臣の家になつきをつたへさせ侍りけるにその
なつきにくはへて貫之にたくりける

みつね

人につくたよりだになし大あらきのもりのしたなる草のみなれは

兼忠朝臣の母みまかりにけれはかれたゝをは故枇杷
左大臣の家にむすめをはきさいの宮にさふらはせん
とあひさためてふたりなからまつ枇杷の家にわたし
送るとてくはへ侍りける　兼忠朝臣の母の乳母

結ひたきしかたみのこたになかりせは何にしのふの草をつま〳〵し
物たもひ侍りけるころやんことなきたかきところよ
りこはせたまへりけれは　よみ人しらす

うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬものはなみたなりけり
よの中のこゝろにかなはぬ事まうしけるついてに
貫之

をしからてかなしき物は身なりけりうき世そむかん方をしらねは
たもふこと侍りけるころ人につかはしける

たもひ出るこきそかなしき世の中はそらゆく雲のはてをしらねは　よみ人しらす

たいしらす

あはれこもうしこもいはし陽炎のあるかなきかにけぬるよなれは　身1

あはれてふこことになくさむよの中をなこか悲しこいひてすくらん

はりまのくに〻たか〻たこいふ所にたもしろき家も

ちて侍りけるを京にて母かたもひにて久しうまから

てかのたか〻たに侍る人にいひ遣しける

物たもふこゆきてもみねは高かたの嶺のこまやはくちやしぬらん

延喜御時こきの藏人のもこにそうしもせよこたほし

くてつかはしける　みつね

夢にたにうれしこも見はうつ〻にて佗しきよりはなほまさりなん

後撰和歌集巻第十七

雜歌三

いそのかみこいふ寺にまうて〻日のくれにけれは夜

あけてまかりかへらんこてこ〻まりて此寺に遍昭は

へりこ人のつけ侍りけれは物いひこ〻ろみんこてい

ひ侍りける　小町

いはのうへに旅ねをすれはいこさむし苔のころもを我にかさなん

かへし　遍昭

世をそむくこけの衣はた〻ひこへかさねはうこしいさふたりねん

法皇のかへり見たまひけるをのち〳〵は時たころへ

ありしやうにもあらすなりにけれは里にのみ侍りて
たてまつらせける　せかゐのきみ
あふことの年きりしぬるなけきにはみの數ならぬ物にそありける
女のもとよりあたにきゝゆることなどいひてはへり
けれは　左大臣
あた人もなきにはあらすありながら我身にはまたきゝもならはぬ
たいしらす　よみひとも
宮ひとゝならまほしきををみなへしのへより霧のたち出てそくる
かしこまることと侍りて里にのみ侍りけるを忍ひてさ
うしにまゐれりけるをたほいまうちきみのなとか音
もせぬこうらみけれは　大輔
わか身にもあらぬ我みの悲しきはこゝろもことになりやしにけん

人のむすめに名たち侍りて　よみ人しらす
世の中をしらすなからもつの國のなにはたちぬる物にそありける
なき名たち侍りけるころ
よとゝもに我ぬれきぬとなる物はわふるなみたのきするなりけり
前坊たはしまさすなりてのころ五節の師のもとにつ
かはしける　大輔
うけれともかなしき物をひたふるにわれをや人のたもひすつらん
かへし　よみ人しらす
悲しきもうきもしりにしひとつ名をたれをわくとか思ひすつへき
大輔かさうしにあつたゝの朝臣のものへつかはしけ
る文をもてたかへたりけれはつかはしける　大輔

みちしらぬ物ならなくにあしひきの山ふみまよふひこもありけり
かへし　　あつた〳〵の朝臣
しらかしの雪もきえぬるあしひきのやまちを誰かふみまよふへき
いひちきりて後こと人につきぬこき〳〵て　　よみ人しらす
いふことのたかはぬ物にあらませはのちうき事もきこえさらまし
たいしらす　　伊勢
面影をあひみしかすになすときはこゝろのみこそしつめられけれ
かしらのしろかりける女を見て
ぬきこめぬかみのすちもてあやしくもへにける年の數をしるかな
題しらす　　よみ人も
なみかすにあらぬ身なれは住よしの岸にもよらすなりやはてなん

つきもせす憂きことの葉のたほかるをはやく嵐のかせもふかなん
いとしのひてかたらひける女のもとにつかはしける
文を心にもあらてたとしたりけるを見つけてつかはしける
嵩かくれありそにかよふあをたつのふみたく跡はなみもけたなん
むかしたなし所に宮つかへしける人としころいかにそなとひたこせ侍りけれは遣しける　　伊勢
みは早くなきものゝことなりにしをきえせぬ物はこゝろなりけり
はらからの中にいかなる事かありけんつねならぬさまに見え侍りけれは　　よみ人しらす
むつましきいもせの山のなかにさへ隔つる雲のはれすもあるかな

女のいこくらへかたく侍りけるを相はなれにけるか
こと人にむかへられぬこきゝて男のつかはしける
我ためにたきにくかりしはし鷹の人のてにありこきくはまことか
くちなしある所にこひにつかはしたりけるにいろの
いこあしかりけれは
いろにたてゝいはねこしるし口なしのいろは我ためうすきなりけり
たいしらす
たきつ瀬のはやからぬをそ恨みつるみすこも音にきかんと思へは
人のもとに文つかはしける男ひこに見せけりこきゝ
てつかはしける
みな人にふみ見せけりなみなせ川そのわたりこそまつはあさけれ
つくしのしら河こいふ所にすみ侍りけるにまへより

大貳藤原の興範朝臣のまかりわたるついてに水たへ
んこてうちよりてこひ侍りけれは水をもて出てよみ
侍りける　ひかきの姫
年ふれはわかくろかみもしら川のみつはくむまてたいにけるかな
かしこに名たかくこことこのむ女になん侍りける
しそくに侍りける女の男になたちてかゝることなん
ある人にいひさわけこいひはへりけれは　貫之
かさすこもたちこたちなん浮名をはこことなし草のかひやなからん
たいしらす
歸りくる道にそけさはまこふらんこれになすらふはなきものを
女のもこに文つかはしけるを返事もせすしてのちの

ちは文を見もせてこりなんたくこ人のつけゝれは

よみ人しらす

たほそらにゆきかふ島のくも路をそ人のふみ見ぬものこいふなる

きのすけに侍りける男のまかりかよはすなりにけれ

はかの男のあねのもこにうれへたこせて侍りけれは

いこ心うきここかなこいひつかはしたりける返事に

きの國のなくさのはまは君なれやここのいふかひありこきゝつる

すみ侍りける女みやつかへし侍りけるを友たちなり

ける女たなし車にてつらゆきか家にまうてきたりけ

り貫之かめまらうこにあるしせんこてまかりたりて

侍りけるほこにかの女をたもひかけて侍りけれはし

のひて車にいひいれ侍りける　つらゆき

波にのみぬれつるものをふく風のたよりうれしきあまのつりふね

をここのものにまかりて二こせはかりありてまうて

來たりけるをほこへてのちにここなしひにここ人に

なたつこ聞きしはまここなりこいへりけれは

よみ人しらす

みこりなるまつほこすきはいかてかは下葉はかりも紅葉せさらん

故女四のみこの後のわさせんこてほたいしのすゝを

なん右大臣もこめ侍るこきゝて此すゝをたくるこて

くはへはへりける　真延法師

思ひ出のけふりやまさんなき人のほこけになれるこのみ見はきみ

かへし　右大臣

みちなれるこのみたつねて心さしありこ見るにそねをはましける

さためたるめも侍らすひこりふしをのみすこ女こも
たちのもこよりたはふれて侍りけれは
よみ人しらす

いつこにも身をははなれぬかけしあれはふす床ことに獨やはぬる
前栽のなかにすろの木のたひて侍りこきゝてゆきあ
きらのみこのもとより一木こひに遣したりけれはく
はへて遣しける
真延法師

風しもに色もこゝろもかはらねはあるしに似たるうゑ木なりけり
かへし
行明のみこ

山ふかみあるしにたるうゑ木をはみえぬ色こそいふへかりける
大井なる所にて人々さけたうへけるついてに
なりひらの朝臣

たほゐ川うかへるふねのかゝり火にをくらの山もなのみなりけり
たいしらす
よみ人も

あすか川わか身ひこつの淵せゆゑなへての世をもうらみつるかな
たもふ事侍りけるころ志賀にまうてゝ
世の中をいこひかてらにこしかこもうき身なからの山にそ有ける
ちゝ母侍りける人のむすめに忍ひてかよひ侍りける
をきゝつけてかうしせられ侍りけるを月日へてかく
れわたりけれこ雨ふりてえまかりいて侍らてこもり
ゐて侍りけるを父母きゝつけていかゝはせんすること
てゆるすよしいひて侍りけれは
したにのみはひわたりつる芦のねのうれしき雨にあらはれにけり
人の家にまかりたりけるにやり水に瀧いこたもしろ

かりけれはかへりてつかはしける

瀧つせにたれしらたまをみたりけんひろふこせしに袖はひちにき

法皇よし野の瀧御らんしける御供にて　源昇朝臣

いつのまにふりつもるらん三芳野の山のかひよりくつれたつる雪

みやの瀧うへも名にたひてきこえけりたつる白泡の玉こひゝけは　法皇御製

山ふみしはしめける時　僧正遍昭

今さらに我はかへらしたき見つゝよへこきかすこゝはゝこたへよ

題しらす　よみ人も

たきつせの渦まきこゝにこめくれこなほ尋ねくる世のうきめかな

はしめてかしらたろし侍りける時ものにかきつけは

へりける　遍昭

たらちねはかゝれこてしもぬは玉のわか黒髪をなてすやありけん

みちの國のかみにまかりくたりけるにたけくまの松

のかれて侍りけるを見て小松をうゑつかせて任はて

て後又たなし國にまかりなりてさきの任にうゑしま

つをみて　藤原のもこよしの朝臣

うゑし時ちきりやしけんたけくまの松をふたゝひあひ見つるかな

ふしみこいふ所にてその心をこれかれよみけるに　よみ人しらす

菅はらやふしみのくれに見わたせはかすみにまかふをはつせの山

たいしらす

ここの葉もなくてすきぬるこし月にこのはるたにも花はさかなん

身のうれへ侍りける時つの國にまかりてすみはしめ
侍りけるに　　なりひらの朝臣

難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたるふね
時にあはすして身をうらみてこもり侍りけるとき　　文屋康秀

しらくものきやどる峰のこまつはら枝しけ〻れや日のひかりみぬ
心にもあらぬことをいふころ男の扇にかきつけ侍り　　土佐

ける

身にさむくあらぬ物からわひしきは人のこゝろのあらしなりけり
なからへは人のこゝろも見るへきに露のいのちそかなしかりける
人のもとより久しうこゝちわつらひてほど〳〵しぬ
へくなんありつるといひてはへりけれは

もろ共にいさとはいはてしての山いかてかひとりこえんとはせし　　閑院大君

月夜にこれかれして　　かんつけのみねを
たしなへて峯もたひらになりなゝんやまのはなくは月もかくれし

後撰和歌集巻第十八

雜歌四

よみ人しらす

かはつをきゝて

わか宿にあひやどりしてなくかはつよるになれはや物はかなしき

人々あまたしりて侍りける女のもとに友たちのもと

より此ころはたもひさためたるなめりたのもしき事

なりとたはふれたこせて侍りけれは

たま江こくあしかり小舟さしわけてたれを誰とかわれはさためん

男のはしめいかにたもへるさまにかありけん女のけ

しきもとけぬをみてあやしく思はぬさまなるこゝ

いひ侍りけれは

みちのくのをふちの駒ものかふにはあれこそまされなつく物かは

少將にて内にさふらひける時あひしりたりける女藏

人のさうしにつほやなくひたいかけをやこしたきて

にはかに事ありてこほき所にまかり侍りけり此女の

もこより此たいかけをたこせてあはれなる事なこい

ひてはへりける返事に　源よしの朝臣

いつくこてたつねきつらん玉かつらわれはむかしの我ならなくに

たよりにつきて人の國のかたに侍りて京に久しうま

かりのほらさりける時に友たちにつかはしける　よみ人しらす

朝ここにみしみやこちの絶えぬれはここあやまりにこふ人もなし

遠きくにゝ侍りける人を京にのほりたりこきゝてあ

ひまつにまうてきなからこはさりけれは

いつしかこまつちの山のさくら花まちてもよそにきくかかなしさ

たいしらす　伊勢

いせ渡るかはし袖よりなかるれはこふにこはれぬ身はうきぬなり

人めたにみえぬ山ちにたつくもを誰すみかまのけふりこいふらん　北邊左大臣

をここのひこにもあまたこへ我やあたなる心あるこ

いへりけれは　伊勢

あすか川ふちせにかはるこゝろこはみなかみしもの人もいふめり

人のむこのいままうてこんこいひてまかりにけるか

文たこする人ありこきゝて久しうまうてこさりけれ

はあこうかたりの心をこりてかくなん申めるこいひ
遣しける　　女のはゝ
いまこんこいひしはかりを命にてまつにけぬへしさくさめのこし
かへし　　むこ
かすならぬ身のみ物うくたもほえて待るゝまてもなりにけるかな
つねにまうてくこてうるさかりてかくれけれはつか
はしける　　よみひこしらす
ありこきく音羽のやまのほこゝきすなにかくるらんなく聲はして
物にこもりたるにしりたる人のつほねならへて正月
たこなひていつるあかつきにいこきたなけなるした
うつを落したりけるをこりてつかはすこて　　りイ
あしのうらのいこきたなくも見ゆる哉波はよせても洗はさりけり

たいしらす
人こゝろたこへて見れはしら露のきゆるまもなほひさしかりけり
よの中こいひつる物かかけろふもあるかなきかの程にそありける
友たちに侍りける女の年ひさしくたのみて侍りける
男にこはれす侍りけれはもろこもになけきて
かくはかりわかれのやすき世の中につねこたのめる我そはかなき
つねになき名たち侍りけれは　　伊勢
ちりにたつ我名きよめんもゝしきの人のこゝろをまくらこもかな
あたなる名たちていひさわかれける比ある男ほのき
きてあはれいかにそこひ侍りけれは　　こまちかうまこ
憂きこことをしのふるあめのめの下にして我ぬれきぬはほせこかわかす

こなりなる琴をかりてかへすついてに

よみ人しらず

あふことのかたみの聲のたかけれはわかなくねこも人はきかなん

たいしらす

涙のみしる身のうさもかたるへくなけくこゝろをまくらこもかな

伊勢

物たもひけるころ

あひにあひて物たもふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる

ある所にてすのまへにかれこれ物かたりし侍りける

をきゝてうちより女の聲にてあやしくものゝあはれ

しりかほなるたきなかなといふをきゝて

つらゆき

哀てふことにしるしはなけれともいはてはえこそあらぬものなれ

女こもたちの常にいひかはしけるを久しうたこつれ

さりけれは十月はかりにあた人の思ふこいひしこと

の葉はといふ古こをいひ遣したりけれは竹のはに

かきつけてつかはしける

よみひとしらす

うつろはぬ名になかれたるかは竹はいつれのときか秋をしるへき

題しらす

贈太政大臣

深くたもひそめつといひし言の葉はいつかあき風ふきてちりぬる

返し

伊勢

こゝろなき身は草木葉にもあらなくに秋くるかせにうたかはるらん

たいしらす

身のうさをしれはしたになりぬへみ思へは胸のこかれのみする

よみ人しらす

雲路をもしらぬわれさへもろ聲にけふはかりこそなきかへりぬる
またきから思ひこき色にそめんこや若むらさきのねをたつぬらん

いせ

見えもせぬふかきこゝろをかたりては人にかちぬと思ふものかは

伊勢か亭子院にまゐりてさふらひけるに御ときのたろしたまはせたりけれは

いせの海に年へてすみし蜑なれこかゝるみるめはかつかさりしを

あはたの家にて人につかはしける　かねすけの朝臣

あしひきの山のやとりのかひもなし峰のしらくもたちしよられは

左大臣の家にてかれこれ題をさくりて歌よみけるに

露といふもしをえて　藤原たゝくに

戒ならぬくさ葉も物はたもひけりそてよりほかにたけるしらつゆ

人のもとにつかはしける　伊勢

ひとこゝろあらしの風のさむけれは木のめもみえす枝そしをるゝ

ことひとをあひかたらふとき〻てつかはしける　讀人不知

うきなから人をわすれんことかたみ我こゝろこそかはらさりけれ

ある法師の源のひとしの朝臣の家にまかりてすゝの

すかりをたこしけるをあしたにたくるとて

うたゝねの床にこまれるしら玉はきみかたきつる露にやあるらん

返し

かひもなき草のまくらにたくつゆの何にきえなてたちこまりけん

たいしらす

思ひやるかたもしられすくるしきは心まこひのつねにやあるらん

むかしをたもひ出てむらこの内侍につかはしける　左大臣

すゝ蟲にたこらぬねこそなかれけれむかしの秋をたもひやりつゝ

ひこり侍りけるころ人のもこよりいかにそここふら

ひて侍りけれはあさかほの花につけて遣しける　よみひこしらす

夕くれのさひしきものは朝かほのはなをたのめる宿にそありける

左大臣のかゝせ侍りけるさうしのたくにかきつけは　つらゆき

へりける

はゝそ山みねのあらしの風をいたみふる言の葉をかきそあつむる

たいしらす　こまちかあね

世の中をいこひて蜚のすむかたもうきめのみこそ見えわたりけれ

むかしあひしりて侍りける人のうちにさふらひける　伊勢

もこにつかはしける

やま川の音にのみきくもゝしきを身をはやなからみるよしもかな

人にわすられたりこきく女のもこに遣しける　よみ人しらす

よの中はいかにやいかに風のたこをきくにも今はものやかなしき

かへし　いせ

世のなかはいさこもいさや風の音は秋にあきそふこゝちこそすれ

たいしらす　よみひこも

たこへくる露こひこしき身にしあれはわか思にも消えんこやする

つらかりける男のはらからのもこに遣しける

さゝかにの空にすかける糸よりもこゝろほそしや絶えぬこ思へは

かへし

風ふけはたえぬと見ゆるくものいも又かきつかてやむこやはきく

ふしみといふ所にて

なにたちてふしみの里といふここは紅葉をここにしけはなりけり

題しらす　　ひこしきこのみこ

我もたもふ人もわするなありそ海のうらふく風のやむこきもなく

あしひきの山したこよみなく鳥もわかここたえす物おもはしい　　山田法師

神無月のついたちころめのみそかをここしたるを見

つけいひなこしてつこめて　　よみ人しらす

今はこてあきはてられし身なれこも霧たちつかひこをえやはわする〳〵

十月はかりむかしにもしろかりし所なりこて北山の

ほこりにこれかれあそひ侍りけるついてに　　かねすけの朝臣

たもひ出てきつるもしるくもみち葉のいろは昔にかはらさりけり

たなし心を　　坂上是則

峰たかみゆきても見へきもみち葉をわかゐなからもかさしつる哉

しはすはかりにあつまよりまうて來ける男のもこよ

り京にあひしりて侍りける女のもこに正月ついたち

まてたこつれす侍りけれは　　よみ人しらす

まつ人はきぬこきけこもあらたまの年のみこゆるあふさかのせき

後撰和歌集巻第十九

離別歌

みちの國へまかりける人に火うちをつかはすとてか　つらゆき

きつけ侍りける

をり〳〵にうちてたく火の煙あらはこゝろさすかを忍へこそ思ふ

あひしりて侍りけるひこの東のかたへまかりけるに

櫻の花のかたにぬさをしてつかはしける　よみひこしらす

あた人のたむけにをれるさくら花あふ坂までは散らすもあらなん

こほくまかりける人に餞し侍りける所にて

たもひやるこゝろはかりはさはらしを何へたつらん峯のしらくも

しもつけにまかりける女に鏡にそへて遣しける　　橘直幹

ふたこ山こもにこえねこますかゝみそこなる影をたくへてそやる

しなのへまかりける人にたきものつかはすとて　　よみ人しらす

しなのなるあさまのやまも燃ゆなれはふしの煙のかひやなからん

こほき所へまかりける友たちにひうちにそへてつか　　するか

はしける

此たひもわれをわすれぬものならはうちみんたひに思ひいてなん

京に侍りける女こをいかなる事か侍りけん心うしと　　よみ人しらす

てこゝめたきていなはの國へまかりけれは

うちすてゝ君かいなはの雲の身はきえぬはかりそありこたのむな　　むすめ

伊勢へまかりける人こくいなんと心もこなかるこき

きて旅のてうこなこ取らするものからたゝうかみに

かきてこらする名をは馬こいひけるに

をしこたもふ心はなくて此たひはゆく馬にむちをたほせつるかな

返し

君かてをかれゆくあきの末にしも野かひにはなつうまそかなしき

たなし家に久しう侍りける女のみのゝ國にたや侍り

けるこふらひにまかりけるに　　藤原きよたゝ

いまはこてたちかへりゆく古さこのふはの關やにみやこわするな

遠き所にまかりける人に旅の具つかはしけるかゝみの箱のうらにかきつけてつかはしける　たほくほののりよし

身をわくることのかたさにますかゝみ影はかりをそ君にそへつる

此たひの出たちなん物うく覺ゆるこいひけれは　よみ人しらす

はつかりの我もそらなるほこなれはきみも物うき旅にやあるらん

あひしりて侍りける女のひこの國にまかりけるにつかはしける　公忠朝臣

いこせめてこひしき旅のからころも程なくかへすひこもあらなん

返し　をんな

唐ころもたつ日をよそにきく人はかへすはかりのほこも戀ひしを

三月はかりにこしの國へまかりける人にさけたうへけるついてに　よみひこしらす

こひしくはここつてもせんかへるさの雁かねはまつ我やこになけ

善祐法師の伊豆の國になかされ侍りける時　伊勢

別れてはいつあひみんこ思ふらんかきりある世のいのちこもなし

題しらす　よみ人も

そむかれぬ松のちこせの程よりもこも〳〵こたにしたはれそせし

返し

こも〳〵こしたふなみたのそふ水はいかなる色にみえてゆくらん

亭子院のみかこたりゐたまうける秋弘徽殿のかへに　伊勢

かきつけゝる

別るれこあひもをしまぬもゝしきを見さらんこゝの何(やイ)かかなしき

みかこ御覧して御返し

みひこつにあらぬはかりをたしなへて行廻りてもなこか見さらん

みちの國へまかりける人に扇てうしてうたゐにかゝ

せ侍りける　　よみ人しらす

わかれゆくみちのくも居になりゆけはこまる心もそらにこそなれ

むねゆきの朝臣のむすめみちのくにへくたりけるに

いかて猶かさこりやまに身をなして露けき旅にそはんこそたもふ

かへし

笠こりの山こたのみしきみをたきてなみたの雨にぬれつゝそゆく

をこの伊勢の國へまかりけるに

きみかゆくかたにありてふなみた川まつは袖にそなかるへらなる

旅にまかりける人にさうそくつかはすこてそへてつ

かはしける

袖ぬれて別れはすこもからころもゆくこないひそきたりこをみん

返し

わかれちはこゝろもゆかすから衣きれはなみたそさきたちにける

旅にまかりける人に扇つかはすこて

そへてやる扇のかぜしこゝろあらは我たもふ人のてをなはなれそ

友則かむすめのみちのくにへまかりけるに遣しける

しけもこかむすめ

君をのみしのふのさこへゆくものをあひつの山のはるけきやなそ

つくしへまかるこていさきよいこの命婦にたくりは

へりける

小野好古朝臣

こしをへてあひみる人のわかれぢ(に)はをしき物こそいのちなりけれ

出羽よりのぼりけるにこれかれ馬のはなむけしける

にかはらけとりて　源のわたる

ゆくさきをしらぬ(もイ)なみたの悲しきはたゝめのまへに落るなりけり

平のたかこほかいやしき名ごりてひこの國へまかり

けるに忘るなこいへりけれはたかこほか女のいへる

忘るなこいふになかるゝなみた川うき名をすゝく瀬こもならなん

あひしりて侍りける人のあからさまにこしのくにへ

まかりけるにぬさ心さすこて　よみ人しらす

われをのみ思ひつるかのこしならはかへるの山はまこはさらまし

返し

君をのみいつはたこ思ひこしなれはゆきゝの道ははるけからしを

秋旅にまかりける人にぬさを紅葉の枝につけてつか

はしける

あきふかくたひゆく人のたむけにはもみちにまさる帯はなかりき

西四條の齋宮の九月晦日くたり侍りけるこもなる人

にぬさつかはすこて　大輔

もみち葉をぬさこちらして手向つゝ秋ここもにやゆかんこすらん

物へまかりける人につかはしける　伊勢

待ちわひてこひしくならは尋ぬへくあこなき水(波イ)のうへならてゆけ

題しらす　贈太政大臣

こんこいひて別るゝたにもある物をしられぬ今朝のまして佗しき

返し　いせ

さらはよこわかれし時にいはませは我もなみたにたほゝれなまし

春かすみはかなくたちてわかるこもかせより外にたれかこふへき　よみひこしらす

返し　いせ

めに見えぬかせに心をたくへつゝやらはかすみのわかれこそせめ

かひへまかりける人につかはしける

君か代はつるのこほりにあえてきね定めなきよのうたかひもなく

身にて物へまかりける人につかはしける

たくれすそこゝろにのりてこかるへき波にもこめよ身みえすとも

かへし　よみ人しらす

身なくはあまの川まてもこめてんこきつゝしほのなかにきえすは

ふねにて物へまかりける人

かねてより涙にそてをうちぬらすうかへるふねにのらんと思へは

返し　いせ

たさへつゝ我は袖にそせきこむる身こすしほになさしこたもへは

遠きこころにまかるこて女のもこにつかはしける　つらゆき

忘れしこここにむすひてわかるれはあひ見んまては思ひみたるな

羈旅歌

ある人いやしき名こりて遠江の國へまかるこてはつ

せ川をわたるこてよみ侍りける　よみ人しらす

はつせ川わたるせさへやにこるらん世にすみかたき我身こ思へは

たはれ島をみて

名にしたはゝあたにそ思ふたはれ島なみのぬれ衣いくよきぬらん

あつまのかたへまかりけるにすきぬるかたゆかしく

たほえけるほとに川をわたりけるに波のたちけるを

見て　　業平朝臣

いとゝしくすきゆくかたの戀しきにうらやましくもかへる波かな

しら山へまうてける道なかよりたよりの人につけて

つかはしける　　よみ人しらす

みやこまてたこにふりくるしら山はゆきつきかたき雲ゐなりけり

なかはらのむねきかみの〻國へまかり下り侍りける

道に女の家にやどりていひつきてさりかたくたほえ

侍りけれは二三日侍りてやむことなきことによりて

まかりたちけれはきぬをつゝみてそれか上にかきて

たくり侍りける　　中原宗興

山さとのくさ葉の露はしけからんみのしろころもぬはすともきよ

土左よりまかりのほりける舟のうちにて見侍りける

に山のはならて月の波のなかよりいつるやうに見え

けれはむかし安倍のなかまろかもろこしにてふりさ

けみれはこいへるこをたもひやりて　　つらゆき

みやこにて山のはに見しつきなれこ海よりいてゝうみにこそいれ

法皇宮の瀧こいふ所御覽しける御こもにて　　菅原右大臣

水ひきのしらいこはへてたるはたを旅のころもにたちやかさねん

道まかりけるついてに日くらしの山をまかり侍りて

ひくらしの山路をくらみさ夜ふけてこのするゑこに紅葉てらせる

はつせへまうつゝて山のへゝいふわたりにてよみは

へりける　伊勢

くさまくら旅ゝなりなはやまのへにしら雲ならぬわれややゝこらん

うちゝのゝいふ所を

水もせにうきたるゝきはしからみのうちのゝのゝも見えぬ紅葉は

海のほゝりにてこれかれせうえうし侍りけるついて

に　こまち

花さきてみならぬものはわたつ海のかさしにさせる沖つしらなみ

あつまなる人のもゝへまかりける道にさかみのあし

からの關にて女の京にまかりのほりけるにあひて　真静法師

あしからのせきの山路をゆく人はしるも知らぬもうゝからぬかな

法皇ゝほき所に山ふみしたまひて京にかへり給ふに

旅のやゝりしたまうて御ゝもにさふらふ道俗にうた

よませ給うけるに　僧正聖寶

人ゝにけふ〳〵ゝのみこひらるゝみやこ近くもなりにけるかな

土佐より任はてゝのほり侍りけるに舟のなかにて月

を見て　つらゆき

てる月のなかるゝ見れはあまの川いつるみなゝは海にそありける

たいしらす、　亭子院御製

草まくら紅葉むしろにかへたらはこゝろをくたくものならましや

京にたもふ人侍りて遠きゝこころより歸りまうてきけ

る道にゝゝまりて九月はかりに　讀人不知

たもふ人ありてかへれはいつしかのつままつよひの秋そかなしき

草まくらゆふてはかりのなになれや露もなみたもたきかへりつゝ

宮の瀧といふ所に法皇たはしましたりけるにたはせ

ことありて　　素性法師

あき山にまどふこゝろを宮たきの瀧のしらあわにけちやはてゝん

後撰和歌集巻第二十

慶賀

女八のみこ元良のみこのために四十の賀し侍りける

にきくの花をかさしにをりて　　藤原伊衡朝臣

よろつ代の齢にもかれぬしら菊をうしろやすくもかさしつるかな

典侍あきらけいこ父の宰相のために賀し侍りけるに

玄朝法師のもからきぬぬひてつかはしたりければ　　典侍あきらけいこ

雲わくるあまの羽ころもうちきては君かちゝせにあはさらめやは

題しらす　　太政大臣

ことしより若菜にそへて老の世にうれしきことをつまんはかりそ
のりあきらのみこかうふりしける日あそひし侍りけ
るに右大臣これかれ歌よませ侍りけるに

つらゆき

琴の音もたけもちこせの聲するはひこのたもひにかよふなりけり
賀のやうなることし侍りけるこころにて

よみ人しらす

百こせをいはふを我はきゝなから思ふかためは飽かすそありける
左大臣の家のをのこゝをんなこかうふりし裳着はへ
りけるに

つらゆき

たほはらやをしほの山のこまつ原はや木たかゝれ千世のかけみん
人のかうふりする所にて藤のはなをかさして

よみ人しらす

うちよするなみの花こそさきにけれちよまつ風やはるになるらん
女のもこにつかはしける

僧都仁教

君かためまつのちこせもつきぬへしこれよりまさん神のよもかな
年星たこなふこて女檀越のもこよりすゝをかりて侍
りけれはくはへてつかはしける　ゆいせい法師

もゝこせに八十年そへていのりくる玉のしるしをきみ見さらめや
左大臣の家にけうそく心さしたくるこてくはへける

僧都仁教

けうそくをたさへてまさへよろつ代にはなのさかりを心しつかに
今上帥のみこと聞えし時太政大臣の家にわたりたは
しましてかへらせたまふ御たくり物に御本たてまつ

るこて

君かためいはふこゝろのふかけれはひしりのみよの跡ならへこそ　太政大臣

御返し　今上御製

をしへたく事たかはすはゆくすゑの道こほくこもあこはまこはし

今上梅つほにたはしまし〳〵時たき〳〵こらせてたてま

つりたまひける

山ひこのこれるたき〳〵は君かためたほくの年をつまんこそたもふ　御製

御返し

こしの數つまんこすなる重荷にはいこ〳〵こつけをこりもそへなん

東宮の御前にくれ竹うゑさせたまひけるに　きよた〳〵

君かためうつしてうゑるくれ竹にちよもこもれるこゝちこそすれ

院の殿上にて宮の御かたより碁盤いたさせたまひけ

るこいしけのふたに　命婦いさきよいこ

斧のえのくちんもしらす君かよのつきんかきりはうちこ〳〵ろみよ

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもこに　右大臣

なみたてる松のみこりの枝わかすをりつ〳〵千代をたれこかはみん

十二月はかりにかうふりするこころにて　つらゆき

いはふここありこなるへしけふなれこ年のこなたに春もきにけり

哀傷歌

あつこしか身まかりにけるをまたきかて東より馬を
たくりて侍りけれは　左大臣
またしらぬ人もありけりあつま路に我もゆきてそすむへかりける
あにのふくにて一條にまかりて　太政大臣
春の夜のゆめのうちにもたもひきやきみなき宿をゆきて見んこは
返し
やこ見れはねてもさめてもゝ戀しくて夢うつゝこもわかれさりけり
先帝にはしまさて世の中たもひ歎きてつかはしける　三條右大臣
はかなくて世にふるよりは山しなのみやの草木こならましものを
返し　桑輔朝臣
山しなのみやのくさ木こきみならは我はしつくにぬるはかりなり

時望朝臣みまかりてのちはてのに比ちかくなりて人の
もこよりいかにたもふらんこいひたこせたりけれは　こきもちの朝臣の妻
わかれにし程をはてこもたもほえす戀しきここのかきりなけれは
女四のみこの文のはへりけるにかきつけて内侍のか
みにたくり侍りける　右大臣
種もなき花たにちらぬ宿もあるになこかかたみの子たになからん
返し　内侍のかみ
むすひたきし種ならねこもみるここにいこゝしのふの草を摘かな
女四のみこの事こふらひ侍るこて　伊勢
こゝら世をきくか中にもかなしきは人のなみたもつきやしぬらん
返し　よみ人しらす

聞くひともあはれてふなるわかれにはいと〻涙そつきせさりける
先帝たはしまさてのゝのこしの正月一日にたくり侍
りける　三條右大臣
いたつらに今日やくれなんあたらしきはるのはしめは昔なからに
返し　兼輔朝臣
なくなみたふりにし年のころも手はあたらしきにも襞らさりけり
かさねてつかはしける　三條右大臣
人の世のたもひにかなふものならは我身はきみにたくれましやは
女のみまかりて後すみ侍りける所のかへにかの侍り
ける時かきつけて侍りける手を見て　兼輔朝臣
ねぬ夢にむかしのかへを見つるよりうつ〻に物そかなしかりける

あひしりて侍りける女の身まかりにけるをこひ侍り
けるあひたによふけてをしのなきけれは　閑院左大臣
夕くれはねにゆくをしのひとりしてつまこひすなる聲のかなしさ
七月はかりに左大臣の母みまかりにける時たもひに
はへりけるあひたきさいの宮より萩の花を折りてた
まへりけれは　太政大臣
をみなへしかれにし野邊にすむ人はまつさく花をまたてとも見す
なくなりにける人の家にまかりてかへりてのあした
にかしこなる人につかはしける　伊勢
なき人のかたみに見えぬやり水のそこはなみたをなかしてそこし
やまとに侍りける母みまかりて後かのくにへまかる

こて

ひとりゆくこころそうけれふる里のならのならひてみし人もなみ

法皇の御ふくなりける時にひいろのさいてにかきて　京極御息所

ひとにたくり待りける

墨そめのこきもうすきもみる時はかさねてものそかなしかりける

女四のみこかくれ侍りにける時　右大臣

きのふまて千世こちきりし君をわかしての山路にたつぬへきかな

先坊うせたまひての兼大輔につかはしける　はるかみの朝臣の女

あら玉のこしこえくらし常もなきはつうくひすの音にそなかる〻

返し　大輔

ねにたて〻なかぬ日はなしうくひすの昔のはるをたもひやりつ〻

たなし年の秋　玄上朝臣女

もろともにたきゐしあきの露はかりか〻らん物こたもひかけきや

きよた〻か枇杷大臣のいみにこもりて侍りけるにつかはしける　藤原守文

世の中のかなしきことをきくの上にたく白つゆそなみたなりける

かへし　きよた〻

きくにたに露けかるらんひとの世をめにみし袖をたもひやらなん

兼輔朝臣なくなりてのち土左の國よりまかりのほりてかの粟田の家にて　つらゆき

うゑたきしふた葉の松はありなからきみか千年のなきそかなしき

其ついてにかしこなる人

君まさてこしはへぬれこふるさこにつきせぬ物はなみたなりけり

人のことふらひにまうてきたりけるにはやくなくなり
にきこいひ侍りけれはかへての紅葉にかきつけ侍り
ける　　戒仙法師

すきにける人をあきしもこふかちに袖はもみちのいろにこそなれ
なくなりて侍りける人のいみにこもりて侍りけるに
雨のふる日ひとのことひて侍りけれは　　よみ人しらす

袖かわくときなかりつるわか身にはふるを雨ともたもはさりけり
ひとのいみはてゝもとの家にかへりけるに
ふるさとに君はいつらと人とはゝいつれの空のかすみといはまし
敦忠朝臣身まかりて又のことしかの朝臣のをのなる家
みんとてこれかれまかりて物かたりし侍りけるつい

てによみ侍りける　　清正

君かいにしかたやいつこそしら雲のぬしなき宿とみるそかなしき
親のわさしに寺にまうてきたりけるをきゝつけても
ろともにまうてまし物をと人のいひけれは　　よみ人しらす

わひ人のたもとにきみかうつりせは藤のはなとそいろは見えまし
かへし
よそにをる袖たにひちし藤ころもなみたに花もみえすそあらまし
題しらす　　伊勢

程もなくたれもたくれぬ世なれともとまるはゆくを悲しとそみる
人をなくなしてかきりなく戀ひてたもひいりてねた
る夢にみえけれは思ひけるひとにかくなんといひつ

はかしたりけれは　　玄上朝臣女

ごきのまもなくさめつらんさめぬまは夢にたにみぬ我そかなしき

返し　　大輔

悲しさのなくさむへくもあらさりつゆめのうちにも夢ごみゆれは

在原のごしはるか身まかりにけるをきゝて　　伊勢

かけてたに我みのうへこたもひきやこんごし春のはなを見しごは

一つかひ侍りける鶯のひごつかなくなりにけれはご

まれるかいたくなき侍りけれは雨のふり侍りけるに

なく聲にそへてなみたはのほられねど雲のうへよりあめごふるらん

つまの身まかりてのごしのしはすのつこもりの日ふ

るこごいひ侍りけるに　　象輔朝臣

なき人のごもにしかへる年ならはくれゆくけふはうれしからまし

かへし　　つらゆき

こふるまにごしのくれなはなき人のわかれやいご〻遠くなりなん

255
257

明治四十二年七月十五日印刷
明治四十二年七月十八日發行

編者　中川恭次郎

發行者　東京市本郷區龍岡町三十四番地　田中增藏

印刷者　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地　今井甚太郎

印刷所　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地　歌學書院印刷部

發行所　歌書刊行會

發兌元　東京本郷區千駄木林町一七二（電話下谷二七四五ノ四）　歌學書院